

須恵器の一起源研究

小 池 寛

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

須恵器の一起源研究

小池 寛

1. はじめに

須恵器の起源が、朝鮮半島の陶質土器にあることは、すでに周知の事実である。しかし、近年、須恵器の器形ごとの編年研究が進展し、その起源が、従来から考えられてきたように一元的ではないことが明らかにされつつある。その背景には、朝鮮半島との文化的交流や政治的外交が恒久的であったこと。そして、日本国内の各地域と伽耶地域や百済・新羅との多元的な交流があったことなどが考えられる。一方、陶質土器についても国ごとの特徴が明らかになるとともに、各地域の器形ごとの編年研究が進展している。

筆者は、かつて須恵器の把手付椀や甕、提瓶などの起源について、中国の青銅器や陶磁器を源流とする陶質土器に求めたことがある。本稿では、それらの起源研究を基に古墳時代中期末の須恵器・壺の蓋に焦点を当て、須恵器の起源について私見を述べるものである。

2. 須恵器および陶質土器の起源研究小史

瓦質土器・陶質土器の起源研究は、1920年の慶尚南道金海市金海貝塚の調査でその扉が開けられた。この調査では、層位ごとに取り上げられた土器の編年研究が行われた。その調査手法と研究成果は、それ以後の瓦質土器・陶質土器の編年研究の基層となった。特に、金元龍は、金海式土器の起源が、中国・漢代の繩蓆文土器にあることを言及した。^(註1) 一方、崔鐘圭は、後期無文土器の深鉢・甕・高杯が、漢代の灰陶や灰釉陶の影響を受け、瓦質土器が成立したことを指摘するとともに、金海市禮安里土壙墓出土土器に焦点をあて、古式陶質土器の出現を3世紀後半とした。^(註2) また、申敬澈は、壺形土器の特徴から中国・越州磁器との関連で陶質土器が成立したことを指摘した。^(註3)

その後、崔鐘圭は、陶質土器の起源が一元的ではなく、中国戦国時代の文物や越州青磁、そして、原三国時代の瓦質土器から生成されたとする説など多元的な論説を展開した。そのなかで陶質土器が成立するうえで中国の灰釉陶や印文硬陶の部分的な影響があったことを指摘するとともに、有蓋臺附壺の把手が中国の中原・楽浪・帯方系の青銅器の影響下で成立したことを論じた。一連の崔鐘圭研究は、陶質土器の起源研究の方向性を決したといえる。

以後の陶質土器起源研究は、特徴的な器形が中心となり展開される。その委細については紙幅の関係で割愛するが、本論を進めるうえで陶質土器の起源について述べた拙稿についてふれておきたい。

陶質土器・把手付椀の起源として4世紀の中国西晋から東晋で生産された青磁鉄斑文蛙形壺およびそれに類似する器形を候補にあげた。^(注5)また、朝鮮半島の陶質土器・椀が、単体で副葬される事例が多いことに着目し、日本での把手付椀の単体副葬が、朝鮮半島の葬送儀礼を踏襲していることを論じた。^(注6)さらに、飛鳥時代に出現する須恵器・把手付椀および椀は、初期須恵器の系譜上にないことを編年研究で明らかにしたうえで、6世紀末から7世紀初頭の陶質土器・椀が、その祖型となったことを論じた。^(注7)当該期は、佐波理椀などの金属器の模倣が一般的に支持されるなか、陶質土器の模倣も視野に入れる必要を論じた。

須恵器・壺の起源については、陶質土器・広口有孔壺に祖型を求めた。そして、広口有孔壺の起源を3世紀後半の中国西晋、江蘇省南京市板橋鎮出土の青磁鷹首壺や4世紀の中国東晋、江蘇省鎮江市出土の黒釉天鵝壺などに求めた。特に、黒釉天鵝壺に代表される古越磁は、後漢代の黒釉陶を起源としており、長谷部楽爾は浙江省徳清窯址や上董窯址あたりが生産地と推定している。^(注8)^(注9)

大半の須恵器が初源期から成立するなか、古墳時代後期の副葬品として広い地域で生産が始まる提瓶について、慶尚南道金海郡大東面禮安里30号墳出土の扁壺にその直接的な起源を求めた。^(注10)また、陶質土器・扁壺の起源として中国遼寧省旅大市老鉄山西麓貝墓出土の漢代の灰釉扁壺や江蘇省南京市張家庫前頭山や江蘇省金壇県白塔公社から出土した魏晋南北朝期の青磁扁壺にその起源を求めた。一方、扁壺の用例として、中国・秦代の画像磚に賓客を迎える際の酒器として描かれている図像を根拠に陶質土器・扁壺ならびに須恵器・提瓶が酒器であることを指摘した。

今後、瓦質土器や陶質土器の成立期における中国との文化的交流や政治的外交の具体的な研究の進展が待たれるが、必ずしも朝鮮半島と中国の交流や外交上のできごとと編年上の画期が一致しないことは、既に指摘されている点^(注11)を付記しておきたい。

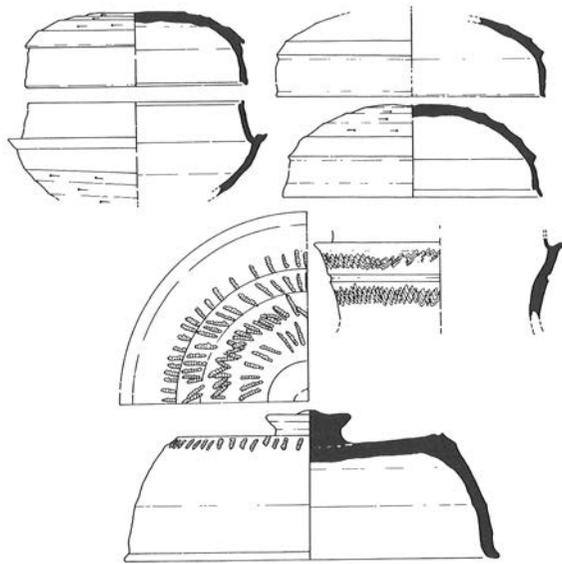
3 須恵器・壺の蓋における起源研究

(1) 研究対象とする須恵器・壺の蓋について

本稿で検討の対象とする蓋は、平らな天井部の中央に扁平なつまみを有し、天井部には3列の刺突文帯(幼虫文)を施し、さらに天井部と口縁部の屈曲部直下にも同工具による刺突文帯を施す。口縁部はやや内湾し、口唇部は外反する。焼成はやや不良であり、器表面の色調は煤竹色(Munsell:9.5YR3.5/1.5)を呈し、口径20cm、器高10cm、天井部最大径

は14cmである。当該資料は、京都府相楽郡精華町森垣外遺跡から出土しており、供伴土器から陶邑編年TK23～TK47型式併行期に比定できる。

森垣外遺跡地内の最高所の標高は46mを測り、当該地から南山城南半域を広く見渡すことができる。発掘調査により掘立柱建物が主要な居住施設であることが判明した。柱穴P653からTK216型式の甕が出土しており、集落の成立は古墳時代中期初頭には確実に



第1図 須恵器蓋と共伴土器実測図(S=1/4)

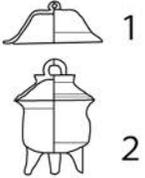
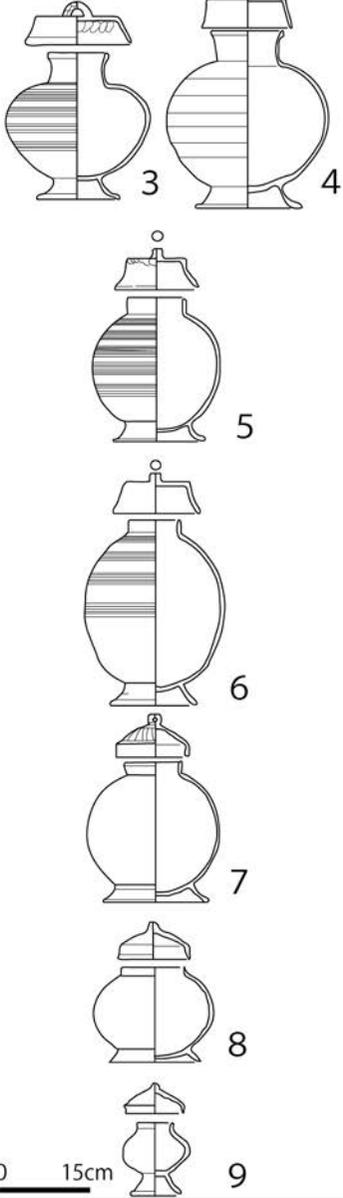
に遡ることができる。特に、B1地区において一辺47mの方形区画溝を2か所で確認しており、首長の居住空間として捉えることができる。神戸市松野遺跡の方形区画と同規模であり、同一規格性がうかがえる。なお、掘立柱建物を主要な居住施設としていることに起因し、柱穴内の土器埋納が多くみられる。

一方、森垣外遺跡の特徴の一つとして、大壁住居址がある。3棟検出しているが、先に述べた首長の居住空間内には存在していない。大壁住居の基礎布掘り内からの土師器壺から古墳時代中期中葉から後半に比定できる。一方、掘立柱建物と密接に関係する遺構として貯木施設がある。用材確保と用材強化が主要な使途であろう。

調査区内全域において鉄滓が点々と出土することと鍛冶に関する炉を確認していることから、集落内での鉄器生産を首肯できる。また、滑石や緑色凝灰岩の製品や未成品、原石が出土することから、集落内での祭祀具や装身具の生産も行われていた。琥珀の出土も見逃せない。また、馬歯埋納土坑や紀淡海峡や大阪湾岸からもたらされた製塩土器は、馬の集落内飼育と関連している。

一方、5世紀初頭に編年できる縄蓆文土器が陶邑編年MT15型式併行期の土坑から出土している。また、格子叩き目を有する韓式土器片が複数、出土している。縄蓆文土器の肩部は、無紋叩きにより成形し、肩部以下を縄蓆文叩きにより成形している。百済地域からの搬入品ではないかとの見解もある。

以上から、集落の成立時期についてはTK216型式を中心とする時期に比定できる。一方、

<p>中 国</p>	 <p>1 2</p>	<p>前 5,000 年 1 浙江省余姚県河姆渡遺跡 前 4,000 ~ 2,600 年 2 山東省泰安県大汶口遺跡</p>
<p>朝 鮮 半 島</p>	 <p>3 4 5 6 7 8 9</p> <p>0 15cm</p>	<p>3 世紀前 ~ 中 3 蔚州広域市 下岱里遺跡 4 伝慶尚南道陝川出土 3 世紀中 5 釜山市老圃洞 31 号墳 3 世紀末 ~ 4 世紀初 6 金海禮安里 74 号墳 類似資料 7 出土地不詳 8 慶州市朝陽洞採集 5 世紀 9 慶州市皇吾洞採集</p>

第2図 中国・朝鮮半島出土資料集成

集落の廃絶時期は、首長居住空間を区画する溝上で陶邑編年MT15型式併行期に比定できる竪穴建物を検出していることから6世紀前半には掘立柱建物を主要施設とする集落は解体され、通有にみられる竪穴建物によって構成される集落へと変貌することが把握できた。

当該期は、地域首長墓である前方後円墳の廃絶時期と同一期であることから、集落の解体には、何らかの政治的背景を首肯できる状況である。

なお、同形の蓋は、森垣外遺跡を含め、京都府内の集落や古墳からは出土しておらず、極めて特徴的な器形であることが、起稿する動機となった^(注12)。

同形の蓋は、国内において最古級・最大の須恵器生産地である大阪府陶邑古窯址群では確認されない。この事実は、当該土器の生産を考えるうえで重要である。現時点で日本国内における生産遺跡や消費遺跡での集成を行えていないが、今後、出土地の集成により、当該須恵器の生産と供給について具体的な事例から特定できる土器資料である。

(2) 陶質土器の事例

蔚州広域市下垈里出土の瓦質土器・長頸台付壺の蓋は、口径17.5cm、器高7.4cm、平らな天井部径は13.8cmであり、天井部中央に半環状のつまみが付く。口縁部は僅かに外反し、口唇部は尖頭状である。つまみの整形痕は著しく、天井部直下の内面には指頭圧痕が残る(第2図3)。この土器は、韓炳三編年の4期に比定されている^(注15)。なお、同編年5期の下限年代が3世紀末であることから4期を3世紀中葉に比定している。

伝慶尚南道陝川出土の瓦質土器・短頸壺の蓋は、つまみはなく、平らな天井部から直線的に外反する口縁部を有する(第2図4)。崔鐘圭は、3世紀後半にあたる瓦質土器6段階に比定している。

金海市禮安里160号墳出土の瓦質土器・台付壺の蓋は、口径14cm、器高6.8cm、天井部径は9.8cmである。天井部中央にやや尖頭状のつまみが付く。天井部直下の口縁部は垂下するが、口唇部は著しく外反する。後述する釜山市老圃洞31号墳出土例よりも壺の胴体部が球体に近く、先行型式として認定できるとともに、先に述べた蔚州下垈里出土例より後出し、後述する金海市禮安里74号墳出土例よりは先行する型式である。

出土地不詳ではあるが、瓦質土器・壺の蓋が、慶州市から出土している^(注18)。天井部に近い口縁部は垂下するが、口唇部は著しく外反する。平らな天井部の中央に鳥形のつまみが付く事例としては唯一であろう。つまみ以外の特徴は、金海禮安里160号墳出土例に酷似している。

釜山市老圃洞31号墳出土の瓦質土器・台付壺の蓋は、口径14.3cm、器高6.8cm、天井部径は10cmである。天井部中央に円筒状の短いつまみが付く。口縁部は僅かに外反し、口唇部は尖頭状である(第2図5)。また、同1号墓からは口径13.8cmの蓋が出土している。



写真 慶州市出土例

(国立中央博物館1997『韓国古代の土器－土・芸術・生と死－』より転載)

台付壺の体部は辛うじて球形を保っている点から先に述べた蔚州下垈里出土例と後述する金海禮安里74号墳出土例の中間型式として認定できる。

老圃洞21号墳出土の瓦質土器・台付壺の蓋は、基本的^(注30)に同31号墳出土例に酷似している。平らな天井部には半環状のつまみが付くことから申敬澈^(注21)は、金官加耶1段階に比定している。

金海禮安里74号墳出土^(注22)の瓦質

土器・台付壺の蓋は、口径14.2cm、器高7cm、平らな天井部径は11.5cmであり、天井部中央につまみが付く。口縁部は僅かに外反し、口唇部は尖頭状である。天井部直下内面には指頭圧痕が残る(第2図6)。台付壺の体部が長胴化し、脚部に方形の透かし孔がみられることなどから先に述べた蔚州下垈里出土例よりは後出する型式である。なお、同型式の出土例として、蔚州三光里古墳例^(注23)がある。

慶州朝陽洞採集の台付壺の蓋は、口径11.7cm、器高4.5cm、穹窿状天井部の中央に穿孔されたつまみが付き、口縁部は直線的に垂下する。台付壺の球体をなす胴部は無文であり、短く直立する口縁部から三国時代に比定できる資料である(第2図8)。なお、慶州皇吾洞採集資料^(注24)の台付壺・蓋は、口径9.7cm、器高5.2cm、穹窿状天井を呈する天井部中央につまみを有する(第2図9)。朝陽洞採集事例より後出する型式である。

慶尚北道高靈池山洞35号墳から出土した瓦質土器・長頸壺の蓋は、やや中央部が穹窿状を呈し、中央につまみをもつ。天井部には刺突文が施文され、口縁部はやや内湾する。天井部が平らではないことと瓦質土器・長頸台付壺との器形的な相違が認められるものの、刺突文が施文される共通要素は重要である^(注26)。直接的な系譜とまでは言及できないが、同一系譜上にある5世紀の資料である。なお、池山洞44号墳1号石槨からは、口径17.2cmを測る陶質土器・平底壺の蓋が出土している。平らな天井の中央に扁平なつまみが付き、直線的に外反する口縁部であり、5世紀後半から6世紀前半に比定できる。

新羅出土例^(注28)である5世紀の陶質土器・長頸壺の蓋は、平らな天井部の中央に尖頭状の棒状つまみが付く。器高の40%を占めるつまみは、他に類を見ない。口径は19.3cm、器高は15cm、天井部から緩やかに屈曲し、さらに垂下する口縁部をもつ。つまみと口縁部が

特徴的であり、長頸壺・蓋の一型式として重要である(写真)。¹

以上のように、平らな天井部をもつ蓋は、長頸壺や長頸台付壺の蓋であり、瓦質土器の初源期に出現していることが把握できた。また、5世紀の陶質土器においても同形の蓋が確認できた。出土する遺跡の多くは、新羅ないし伽耶地域に集中している。

(3) 中国の事例

次に、今までみてきた瓦質土器および陶質土器における蓋の祖型について、中国の青銅器及び陶磁器をみておきたい。

中国殷代から西周代は、様々な青銅器が生産された。器形的に本稿の対象とする蓋に近似する青銅器として、体部ならびに蓋の平面形が楕円形を呈する個体が大半を占める紀元前10世紀の西周中期・犧首雷文卣の蓋や紀元前5世紀の戦国時代・盃^(注29)の蓋、さらに戦国時代の青銅器・盃を模した伝浙江省紹興県旧埠出土の灰釉盃などの蓋に類例を求めることができる。

中国の江南地域で前5,000年前後の最古の稲作農耕遺跡として知られる長江流域の浙江省余姚県河姆渡遺跡第4層^(注30)から中央に円環状のつまみをもち、平らな天井部から大きく外反する口縁部をもつ口径16cmの彩陶・蓋が出土している。壺ないし鉢の蓋である(第2図1)。一方、山東省を中心に前4,000～前2,600年に比定できる新石器時代後期の黄河下流域・淮下流域・旅大地区の所在する山東省泰安県大汶口遺跡^(注31)から口径12.9cm、器高6.8cmを測り、平らな天井部の中央に器高の40%を占めるつまみが付く灰陶・三足煮炊甕の蓋が出土している(第2図2)。

中国北部の黄河中流域から下流域を中心に栄えた前2,000～1,500年の二里頭文化期に比定できる河南省偃師県二里頭遺跡^(注32)から口径が27cmを測る泥質灰陶の蓋が出土している。天井部と口縁部間はまだらか、中空の円形つまみをもつ大型甕の蓋と考えられる。口径と形態的特徴から同一系譜上に位置づけられない個体であるが、類似する蓋として取り上げておきたい。

漢代の江南地域で多く出土する青銅刻文堤梁壺^(注33)の蓋は、中央にやや縦長の半球状のつまみが付く。中央部が平らで口縁部と屈曲部までが僅かに傾斜する。天井部には鋸歯文が施される。同じく漢代に広域に分布する青銅有蓋堤梁壺^(注34)の蓋は、反転した際、杯になる機能を有しており、三脚となるデフォルメされた鳥形突起を天井部にもつ。大きく長く内湾する口縁部(杯部)が特徴的である。一方、前漢の湖南や広東地域で生産された青銅器模倣の灰釉陶・錡^(注35)の蓋は、平らな天井部中央に半環状のつまみをもち、大きく広がる口縁部外面中央に明瞭な稜をもつ。

漢代の緑釉陶の事例として、後漢代に比定できる江西省南昌出土の鼎^(注36)の蓋がある。天井

部から口縁部までは同一傾斜で整形されており、天井部と口縁部を明確に区画する稜が施されている。天井部中央にはつまみを配している。

以上が中国における事例である。青銅器にもその源流と考えられる蓋が存在するが、基本的には陶磁器に直接的な起源を求めるべきである。その祖型の多くは、中国大陸の東部にあたる山東省・河南省、江西省、浙江省に点在している。これらの地域と朝鮮半島間には、渤海や黄海、東海が存在しており、文物の交易は盛んに行われたことが、陶磁器以外でも知られている。瓦質土器や陶質土器の祖型が、中国大陸東部にあることが当該資料の類例調査により確認できた^(註37)と思う。

4 まとめ

いわゆる原三国時代の弁韓諸国は、三国時代に入り、百済や新羅のように統一国家としては纏まらず、伽耶連合として存続する。歴史上、532年に金官国が新羅によって滅ぼされ、562年に洛東江流域を勢力基盤としていた任那諸国が新羅によって滅ぼされ、伽耶連合は滅亡する。滅亡後の洛東江流域では、引き続き地域経済は継続され、陶質土器の生産も継続された。伽耶地域での土器編年研究は、伽耶連合が滅亡した562年を編年上の画期として認識されることが一般的である。

かつて、陶質土器・把手付碗の編年を提起した際、型式学的な変化が認められないにも係らず、562年の伽耶連合の滅亡を編年上の画期としたことがある。その背景には、伽耶連合の滅亡が、土器生産をはじめとする全ての経済活動に著しい影響を及ぼしたとする観念的な概念が背景にあった。編年上は、伽耶連合の滅亡が、陶質土器の型式的な変化に大きく影響することはなかったと考えている。

本稿で扱った壺の蓋が、原三国時代の瓦質土器初期から生産が開始された背景には、中国の先鋭的な陶磁器生産の影響がある。これは、後期無文土器から高温焼成による硬質化や成形技術の向上などによる瓦質土器の出現により確認できる。朝鮮半島は中国の圧倒的な影響を受け、常に朝貢冊封関係にあった。前108年には、前漢が衛氏朝鮮を滅ぼし、漢四郡を置くが、両者間には密接な政治的外交や文化的交流下にあった。

さて、日本国内において同形の蓋が5世紀末になって生産が開始される背景には、継体大王による朝鮮半島との文化的交流や政治的外交の恒久化を想定できる。また、器形的には中国大陸東部で生産された陶磁器の影響下で成立した瓦質土器および陶質土器に直接的な祖型を求められる。先に述べたように須恵器・把手付碗が初期須恵器段階で生産され、単体副葬される背景や須恵器・提瓶が6世紀になって国内生産が始まる背景には、朝鮮半島での葬送儀礼の影響があったと考えられるが、本稿で扱った蓋は、初期須恵器段階では

生産されず、陶邑編年TK23～TK47型式併行期に生産が始まる。今後、類例の集成により生産開始時期がさらに遡る可能性もあるが、生産の契機が朝鮮半島の葬送儀礼の伝播によるものなのか、あるいは生活様式や宗教的儀礼の影響によるものなのかは明確になるであろう。

本稿の大半は、単調な事実報告に終始した感が否めない。また、本稿は、その端緒を整理したに過ぎない。しかし、今後の須恵器研究は、器形ごとに異なる用途を考古学や文献研究などの関連分野から考察し、その伝播と生産の背景を明らかにしていく必要を改めて指摘するとともに、須恵器生産の契機を一元的に論じる危険性を改めて指摘し擱筆としたい。

(こいけ・ひろし = 当調査研究センター調査課長)

- 注1 金元龍1960「新羅土器의 研究」『国立博物館叢書 甲第4』
- 注2 崔鍾圭1982「陶質土器 成立前夜의 展開」『韓國考古學報12』
- 注3 申敬澈1982「釜山・慶南出土 瓦質土器」『韓國考古學報12』1982年
- 注4 崔鍾圭1983「瓦質土器の検討と意義」『古代を考える34』
- 注5 小池寛1997「陶質土器の起源について — 盃を中心にして—」『堅田直先生古稀記念論文集』、
小池寛2008「陶質土器・盃に関する基礎研究」『古墳文化とその伝統』
- 注6 小池寛2000「陶質土器、盃の出土状況」『あまのともしび — 原口正三先生古稀記念集』
- 注7 小池寛2016「飛鳥時代における朝鮮半島系土器の生産とその背景」『京都府埋蔵文化財論集』
第7集
- 注8 小池寛1999「遼泉考」『瓦衣千年：森郁夫先生還暦記念論文集』
- 注9 長谷部楽爾1982「魏晉南北朝の陶磁」『世界陶磁全集10』
- 注10 小池寛2010「須恵器提瓶再考」『京都府埋蔵文化財論集』第6集
- 注11 定森秀夫2015『朝鮮三国時代陶質土器の研究』
- 注12 小池寛・松尾史子2000「森垣外遺跡第3次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第91冊
- 注13 大阪府教育委員会、財団法人大阪府文化財センター等刊行の陶邑古窯址群関係報告書及び和泉市教育委員会白石耕治氏のご教示による。
- 注14 釜山大學校博物館1997『蔚州下垵遺蹟-古墳1』
- 注15 韓炳三1989「現三国時代 — 嶺南地方の遺蹟を中心として—」『韓國の考古学』
- 注16 崔鍾圭1987「59. 短頸壺」『菊隠李養淮瑤萬集文化財』国立慶州博物館
- 注17 釜山大學校博物館1993『金海禮安里古墳群2』
- 注18 金元龍1983「所謂「瓦質土器」에 대하여 — 原三國考古學上의 새問題」『歴史學報第
九十九・百号輯』
- 注19 釜山大學校博物館1988『釜山老圃洞遺蹟』
- 注20 釜山大學校博物館1985『釜山老圃洞遺蹟』
- 注21 前掲注3

- 注22 前掲注18
- 注23 前掲注18
- 注24 前掲注18
- 注25 前掲注18
- 注26 啓明大學校博物館1981『高靈池山洞古墳群』
- 注27 定森秀夫1987「韓国慶尚北道高靈地域出土陶質土器の検討」『東アジアの考古と歴史上 岡崎敬先生退官記念論集』
- 注28 前掲注3
- 注29 金関恕1986「No.16犧首雷文卣」『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館藏品 殷周の文物』
- 注30 浙江省文物管理委員会・浙江省博物館1978『浙河姆渡遺址第一期発掘報告』考古学報1978-1
- 注31 中国社会科学院考古研究所山東工作隊・清寧地区文化局1979『山東兗州王因新石器時代遺址発掘簡報』考古学報1979-1
- 注32 中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊1975『河南偃師二里頭早商宮殿遺址発掘簡報、河南偃師二里頭遺址三・八区発掘簡報』考古学報1975-5
- 注33 近江昌司「No.1 青銅刻文提梁壺」1986『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館藏品 漢代の銅器陶器』
- 注34 近江昌司1986「No.1 青銅有蓋提梁壺」『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館藏品 漢代の銅器陶器』
- 注35 佐藤雅彦1982「漢代の陶磁」『世界陶磁全集10 中国古代』
- 注36 注35に同じ
- 注37 楊弘1984「呉、東晋、南北朝文化及其對海東的影響」『考古第4期』